

沖縄キリスト教短期大学報

那覇市首里当蔵町3-6-1
 沖縄キリスト教短期大学
 電話(0988)87-5161
 発行人 学長 大城 実
 編集人 事務局 企画課



「この土の器」なれど

——理事長就任にあたって——

学長 大城 実

一九四五年の夏以来、私の中に繰り返し頭をもたげてくる思い、迷いがある。ことの起こりは、あの夏、迫撃砲の破片を左足に受け、切断を余儀なくされた時であったように思う。「何故この私がこんな目に？」まだ幼かった私は、この思いの前に立ちすくむだけであつた。

あれ以来、その思いは、何かにつけて、つばやきとなつて頭をもたげて来るのである。七年前、学長に選ばれた時の祈りは、「願わくは、この杯を私から取り除いて下さい」であつたし、「何でこの私が苦勞しなければならぬのか」とのつぶやきを抑えることができなかったのである。そして此の度、亀川前理事長の辞任に伴い、理事長の役をも兼ねるにあつた。その思いも、また同じであつた。そのような時の私の目には、予測される困難とその重荷にあえぐ自分の惨めさだけが大きく映し出されて

しまふのである。そして、多くの人々の協力も、神の働きも見えなくなつてゐる。

しかし、この四二年の間、私はこの思いに押し潰されてしまつてゐたのではないし、「運命」を嘆いてきたのではない、むしろ、耐えてきたのだとさえ思つてゐる。それには訳がある。

私は、性格的に管理者向きではないし、又その能力も無い。「才能」とは、自分自身を、自分の力を信ずることである」とは、ゴリキの名言であるが、管理者としての自分に自信の持てない私は、「才能無し」の宣告を受けてしかるべきである。私自身、何もかも投げ出してしまつたといふ、幾度か考えたことか。そのような私を今日まで支えてきたのは、自信でも、能力でも、努力でもなかった。私を支えてきたのは、具体的に協力の手を差し延べて下さつた方々を通して働かれる、私を越えて存在する方々の信頼であつた。聖書を通して聞く神の約束への信頼であつた。

エレミヤは、「わたしはあなたをまだ母の胎につくらぬさきに、あなたを知り、あなたがまだ生まれないさきに、あなたを聖別」したと聞かされ、預言者になつた。

それ故エレミヤには、「若者にすぎない」と口実をつけてこの召命を拒み、力がないからといって勤めを放棄することは許されてゐない。ユダの国を呑みつくそうと襲いかかる新しい世界勢力も、エレミヤの出生も、エレミヤの努力も苦悩も、全て神の計画の中にその場と意味を与えられてゐる。そして、歴史を支配するのは神であるのだから、この事実こそ、つまり神の計画の中にあるということこそ、エレミヤの能力や知識や経験よりはるかに確かであり、信頼に足るものであつた。

理事長兼務が決められた時、私はこのエレミヤ召命の記事を想ひ起こしてゐた。激動する世界勢力の間で、全く無力にすぎないエレミヤを支え、その存在に意味を与えたのは、神の計画の中に位置づけられてゐるという事実であつたのである。この事は、私への約束でもある。私達への約束でもある。私達の存在も、私の取るに足らない働きも、私達すべての苦勞も、全て神の計画の中に位置づけられてゐる。それによって存在意義が与えられてゐるのである。

私達は、本短大の設立を神の御旨によるものと理解してゐた。従つて、今回の移転計画も、神の計画に属するものであると信じてきた。それだからこそ、私達はここまでこれたのである。私はそこに、人間の智慧、人間の努力、人間の働き以上のものを見るのである。本短大を支えてきた多くの

方々の働きの背後に、歴史を支配する方の力を見るのである。その力が働いてゐるからこそ、私達の働きは、どんな小さなものであつても、大きな意味をもつのである。とすれば、私達の小さなさなど何の問題があるのか。私達の無力さなど些細なことではない。むしろ、私達の力が小さく、無力で、取るに足らないからこそ、私達は本短大の歴史に、その将来に神の栄光を、無から有を創り出される神の不思議な力を約束されてゐるのではないだろうか。

言うまでもなく、私達の課題は解決されたのではない。道程はまだ遠く険しい。自分の力だけで、人間の智慧だけで解決しようとする、と、絶望せざるを得ない程である。しかし、今私たちは神の計画の中にあることを知らされてゐる。遂には神の計画が実現するのだから、私たちはパウロと共に、「四方から患難を受けても弱しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害されても見捨てられない。倒されても滅びない」と、告白することを許されてゐるのである。

私は、「この土の器」にすぎない。与えられた責務は、私にとって耐えがたく大きく、重い。しかし、私は「この土の器」として、この使命に全力をつくしたい。「この土の器」のだから、自己を絶対化する事もなく、課題の難しさに失望することなく、支援の手を差し延べて下さる全ての人々に感謝しつつ、共に前進したい。

就職によせて

企画課長 新垣 政信

二年生の諸君、早、就職のシーズンがやってきました。就職について、本学年度から特に変わった点にふれてみたいと思います。

まず始めに、就職協定に関する事です。昨年度は、四年制大学と短大の就職協定は、全く同じ日に開きがあり、選考日も十一月一日以降、一斉に行われてきました。しかし、本学年度から、新就職協定により、四年制大学が八月二十日開き、短大が十月一日となつており、求人内容の学生に対する提示等も含めて約四十日間も遅くなつております。従つて、就職活動に非常に大きなハンディを背負うこととなります。

さて、本土からの帰省学生の就職活動状況を目的とする時期は、ほとんどの学生が夏休み期間を利用して、沖縄県内の大学に求人票の下見に訪れてゐることは、就職戦線に、おのずから拍車をかけることとなります。それにしても、本短大の学生は、就職活動に関し、やや、ノンビリミードの傾向にあり、もっと、早い時期から、協定を無視しない程度に、アクションを起こしてほしいものであります。

次に男女雇用機会均等法が今年の四月から実施されたことにより、同法は、女性労働者の雇用に対する差別や、労働環境を考へる上で大きなキポイントになる法律であります。

すなわち、女性を男の代替物と考へるのではなく、女性特有の長所をどう生かしていくか、戦力化していくかといふことであります。最近、流通業界では、子育ての終わった主婦を対象にした再雇用制度や、パート労働という形態で採用する企業が増加している事は、非常に喜ばしいことであります。しかし、若年層の意識が変化し、多様化している昨今、これから就職しようとする女子学生に求められるのは、何よりも、はつきりとした「仕事をする意志」をもつて職業を選びとることでありつます。

つまり、腰かけ気分や男性に依存した職業観を変えていくことで、女性全体の労働環境を自ら向上させていくことだと思ふするものであります。

最後に、本短大の学生のための就職開拓は、従来の学生部だけの活動から一変して、厚生補導委員会を中心に、学長を始め、諸先生方の協力を得て、お互いに叱咤激励し、活動を展開してきてました。このことは、これから就職を希望する多くの学生を喚起する意味で、誠に意義深いことであります。

本短大の学生諸君が、我々教職員に熱意にだけ答えてくれるのか、アクティブな若い力を我々の前に、もろに、ぶちまけてきてほしいものであります。

例年、本短大の学生は、笛吹けど踊らずじまいで、期待を裏切つた感がないでもありません。巷では、「女子大生は就職難」と毎年言われていますが、はたして本当に就職難なのでしょうか。はっきり言えば、どこでもよければ就職しやすいが、希望の会社に入るのはなかなか難しいといふことの方が多いが、現実ではないといふことか。この一年は、二年生にとって学生生活の総決算となる正念場でありつます。就職希望者の全員が挙つて就職に就けるよう祈願するものであります。(前学生課長)



(弁論中の長嶺ゆかりさん)

キリ短再び 西部地区代表に

第四十回全国学生英語弁論大会西部地区大会が六月十四日、福岡で開催された。西南学院大学、広島学院大学など十三の大学の代表が参加、熱弁をふるつたが、キリ短代表の英語科二年長嶺ゆかりさんが見事入賞、九州女子大の宮崎宏子さんとともに西部地区代表に選ばれた。第三八回大会の福岡陽子さん(当時英語科二年、現在桜美林大学四年)の入賞に続く快挙である。

長嶺さんの演題は、「Just Be Yourself」で、高校時代のアメリカ留学の経験にもとづき、日米の教育を比較、日本の画一化された教育を批判して、生徒一人ひとりの個性を尊重しようといふ主張した。「集団行動することの多い私たち日本人は、国際社会を生きていく上で、もっと個人個人が自分に誇りを持つべきなのでは。スピーチはそんな私の思いを伝えた一心で準備しました」と入賞した長嶺さんは語つた。

長嶺さんは七月二日東京で開かれた全国大会に西部地区代表として出場したが、惜しくも入賞を逃した。優勝者は「What Nature Teaches Us」という演題で話した。慶応大学の佐藤のり子さんであった。

学 生 募 集

沖縄キリスト教短期大学

募集人員	英語科 100名 保育科 50名	男女共学(括)
換 定 料	20,000円	
試験期日	1987年 2月13日(金)～2月14日(土)	
合格発表	2月21日(土)	
願 書 受 付	1987年 1月16日(金)～1月26日(月) 9:00～18:30 (月～土) 本学窓口受付、郵送は締切日必着	
提出書類	1. 入学願書(本学所定用紙) 2. 調査書(出身校作成のもの) 3. 健康診断書(既卒者のみ提出)	
試験科目	国語ⅠⅡ(古文・漢文をのぞく) 英語ⅠⅡ(英語科は自由英作文・ヒヤリングを含む)	
試験会場	本学・名護高校・宮古高校・八重山高校	
取得可能な免許・資格	中学校教諭二級普通免許(英語) 幼稚園教諭二級普通免許 保育資格	

●問い合わせ
 沖縄キリスト教短期大学教務部入試係
 (〒903)那覇市首里当蔵町3-6-1 電話87-5161

- 「You're in」で、高校時代のアメリカ留学の経験にもとづき、日米の教育を比較、日本の画一化された教育を批判して、生徒一人ひとりの個性を尊重しようといふ主張した。「集団行動することの多い私たち日本人は、国際社会を生きていく上で、もっと個人個人が自分に誇りを持つべきなのでは。スピーチはそんな私の思いを伝えた一心で準備しました」と入賞した長嶺さんは語つた。

長嶺さんは七月二日東京で開かれた全国大会に西部地区代表として出場したが、惜しくも入賞を逃した。優勝者は「What Nature Teaches Us」という演題で話した。慶応大学の佐藤のり子さんであった。

▽後援会より還元
 全国大会出場のため、出場費の一部負担金(引率者費用)を後援会より十万円を支援金として還元された。
- ▽辞任(一九八六年九月三十日付)
 亀川第一(理事長)

▽就任(一九八六年十月一日付)
 大城実(理事長兼学長)

▽退職(一九八六年八月三十一日付)
 吉永紀子(図書館書記)

▽採用(一九八六年十月一日付)
 中村敦(総務課書記)

島袋幸子(財務課書記)
 窪田紀子(教務課書記)
 新垣政信(学生課課長・企画課課長(募金担当) 西銘純子(図書館課長・学生課課長) 与儀勝彦(庶務課主任・図書館主任)
 泉川美枝子(教務課書記・財務課主任) 出盛多千夫(総務課書記・学生課書記) 柴野比加代子(総務課書記・総務課・学長室受付)

それ故エレミヤには、「若者にすぎない」と口実をつけてこの召命を拒み、力がないからといって勤めを放棄することは許されてゐない。ユダの国を呑みつくそうと襲いかかる新しい世界勢力も、エレミヤの出生も、エレミヤの努力も苦悩も、全て神の計画の中にその場と意味を与えられてゐる。そして、歴史を支配するのは神であるのだから、この事実こそ、つまり神の計画の中にあるということこそ、エレミヤの能力や知識や経験よりはるかに確かであり、信頼に足るものであつた。

理事長兼務が決められた時、私はこのエレミヤ召命の記事を想ひ起こしてゐた。激動する世界勢力の間で、全く無力にすぎないエレミヤを支え、その存在に意味を与えたのは、神の計画の中に位置づけられてゐるという事実であつたのである。この事は、私への約束でもある。私達への約束でもある。私達の存在も、私の取るに足らない働きも、私達すべての苦勞も、全て神の計画の中に位置づけられてゐる。それによって存在意義が与えられてゐるのである。

私達は、本短大の設立を神の御旨によるものと理解してゐた。従つて、今回の移転計画も、神の計画に属するものであると信じてきた。それだからこそ、私達はここまでこれたのである。私はそこに、人間の智慧、人間の努力、人間の働き以上のものを見るのである。本短大を支えてきた多くの

移転事業の進捗状況について

キャンパス移転企画会議

県内外の多くの方から「キリ短はいっしょ移るか」との質問をしばしば受けます。深い関心をもって注目されている本学移転事業の進捗状況について、「開発行為許可申請」の現状、西原町との交渉経過及び今後の見通し等を含めてご報告申し上げます。

本学がキャンパス予定地の開発を行うためには、当該地の西原町及び県当局の認可を受けることが法的に不可欠であります。これまでに西原町との交渉、事前協議等を経て、町との最終的な調整を終え、八月末には、西原町長と本学理事長との合意に基づき「開発協議書」を締結することができました。町当局の私学に対する深いご理解とご協力に対し心から感謝申し上げる次第であります。

次に、西原町との交渉経過について、概略を申し上げます。「開発行為許可」の申請をするにあたり、理事会は、町当局に対して、(1)本学移転の必然性、(2)新キャンパスの基本構想についての説明会をもちました。

移転の必然性について、少くとも三つの理由をあげることが出来ます。(イ)一九七二年の施設権返還に伴い、短期大学として公認されたものの、校地や校舎面積等は、短大設置基準を充足していないことが指摘されていること、(ロ)教育・学習環境の整備・充実を図るこ

とによって、教学の適正規模を確保し、経営の安定を図る必要があること、(ハ)上記(イ)、(ロ)の課題を解決するためには、現校地は次の三つの理由により不適当であること。即ち、現校地は、狭隘であり、第一種住宅地域内にあるため、これ以上拡張することは法的に困難であり、さらに「首里城公園基本計画」の中で公園地域に指定されていること、(ニ)の理由であります。

新キャンパスの基本構想については、「学報」第二三三号に報告申し上げたように、キャンパスづくりの哲学とその具体像について説明しました。即ち、建学の精神と大学の使命、キャンパスの構造並びに、真、善、美、聖のあるキャンパスであります。この構想は教授会の特別委員会である「新キャンパス構想委員会」の研究成果をふまえたものであります。

今年の三月末、理事会は「開発行為許可申請書」を西原町役場都市計画課に提出いたしました。その申請内容を各課で検討された町当局は、六月には本学のキャンパス設計技術者を含めて、理事会と事前協議を行いました。その席で、町当局は、「西原町基本計画」の中で基本目標に掲げている「文教のまち西原」建設の観点から有効な土地利用についてのご指導と助言を下さいました。たとえば、予定地内の緑地帯をできるだ

け広く残して周辺地域とのバランスを保つこと、排水施設の完備、道路の建設、擁壁作り、隣接地主への配慮、ハブ対策等の解決法であります。

町当局のこうしたご指導と助言をいただき、本学は企画課を中心に、設計担当の方々と頻りに話し合い、設計の差し替え等を行うことにより、町の最終的な承認を得ることができました。

なお、建設省公共用道路(里道)の付替及び加工承認申請書を県用地課に提出しました。さらに、農振地域内にある開発区域の一部除外等の許可も受けております。今後、「開発行為許可申請書」は県の建築課において検討され、各部課による調査、協議を経て早ければ今年度中には結論が出来るものと思われ、開発許可を受けると、一九八七年には、進入道路を含む土地造成を開始し、同時に校舎建設に着手する予定であります。

本事業の財源として、学院債、寄付金、借入金、自己資金を予定しておりますが、特に校舎建築費については、現校地の売却をもってこれに充てることとなります。

以上が、本学移転事業の現在までの進捗状況であります。本学が県内外の多くの方々の物心両面のご援助をいただいで推進しております。本事業が、一日も早く実現できまうように、今後とも皆さま方の尚一層のご指導とご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

寄稿

16期卒業生 高嶺 豊

私は16期生でもう十年以上も前に卒業したことになる。卒業後すぐにハワイ大学に留学し、学部を終え大学院課程で保健学とソーシャル・ワークを学んだ。その後、四年程ハワイの障害者センターでカウンセラーとして働いたが、昨年帰国し現在東京に住んでいる。

今まで何度も沖縄に帰省している。この夏も五日程帰った。そしていつものようにあの坂の上のキリ短を訪ねた。

考えてみれば不思議なものである。帰省するたびにキリ短に顔を出しているのであるから。今度もお馴染みの先生方の顔ももちろん白髪の方は一段と増えているが、一か所あった。この十数歳の歳月は本当に過ぎたのであろうか。昔教わった先生がまだ大勢残っている学校はそうざらにはない。だから十年たってもまだ我々卒業生が気軽に尋ねていけるのである。

もうひとつ気が付くことがある。それは、今帰省して連絡し合う友人はほとんどキリ短時代の連中であるということだ。他にも友人はいるが、この十年だんたん音沙汰がなくなりつつある。

キリ短時代の同級生は、今ではほとんどが家庭を持ち子供がいるが、久しぶりに顔を会わしても、以前と変わらない話ができる。い

今こうして振返ってみると、キリ短に通った二年間が私のこれまでの人生に与えた影響は思ったより大きい。十年前の日本で車椅子使用者の私を無条件で受け入れ、一学生のために教室の移動等の便宜を計ってくれたのがキリ短である。

私の愚考と思われたハワイ大学留学の支援をして下さった人々もキリ短の恩師であり友人達であった。

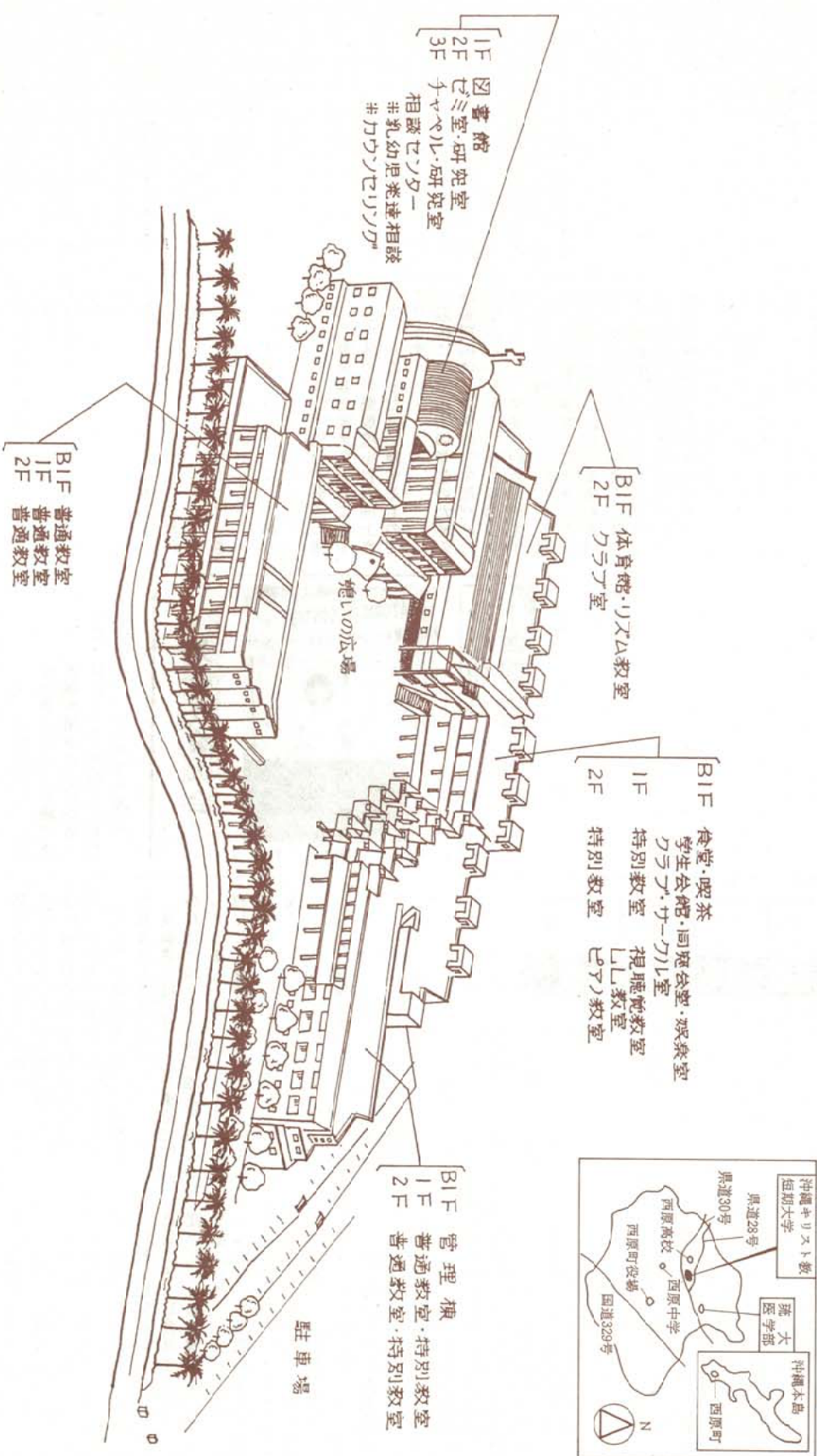
又、キリスト教主義の教育のものと、それに反発しつつではあったが、人生を真剣に生きて行く心構えを教えられた場もあった。人道的そして国際的な人材の育成というキリ短の伝統が連絡と受けつがれ増幅されているのを見、一卒業生として誇りに思う。

国際的に通用する人材の育成が日本で叫ばれ始めてから久しいが、それを実践している大学がどれだけあるだろうか。日本が国際的な責任を担い、世界の政治・経済・福祉に貢献する時代はすでに到来している。その先駆けとしてキリ短の卒業生が各方面で活躍しているが、これからも世界で通用する人材を続々と排出していくことであらう。

(東京在・参議院議員秘書)

施設紹介

付近見取図



沖縄キリスト教短期大学新キャンパス完成予想図